『東亜新報』は日本国内の研究機関・図書館での所蔵が非常に少なく、まとまった形で閲覧することが困難である。同紙は戦時下の中国で刊行されていたため、日本の古書店等で入手できる機会も稀である。そのため研究は立ち遅れており、研究書等で言及されている場合も紙面に当たっていることは多くない。

そうした中で、『東亜新報』の姿を現在に伝えてくれる回想類の存在は貴重である。同紙は有名記者が多く在籍したこともあって、他の「外地」発行日本語新聞に比べて回想類が豊富にあることが特徴のひとつといえる。とりわけ本書に収録した3冊は同紙を知るうえでの基礎的資料であり、入手が困難となっている3冊を今回復刻した意義は大きい。さらに『東亜新報』について知るためだけでなく、「外地」や「北支」の一側面、そこで発行されていた日本語新聞をとりまく状況、戦時下のジャーナリスト達の様相、などを今に知らしめる資料として興味は尽きない。

＊文圃文献類従 74＊　　編・解題……神谷 昌史

『東亞新報』関係資料集

―日本占領下華北の日本語新聞とジャーナリスト

全二・別巻

復刻版

東亜新報創刊当日の記念撮影（昭和14年7月1日）〔一巻より〕

「プロパガンダ活動を担った国策通信社」（内川芳美）とされる同盟通信社の影響のもと発刊された。同盟通信社は新聞聯合社と日本電報通信社の二つが統合され、1936年に設立された通信社である。設立翌年の1937年には日中戦争が勃発し、同盟通信社は対外的な情報宣伝活動を担うようになる。戦争の舞台たる中国における同社の活動のひとつに、中国で刊行されている新聞を統合して新しい新聞を発刊することがあった。

Kanazawa bumpokaku
金沢文圃閣

1939年7月から1945年の日本の敗戦まで、
中国の北京をはじめとする「北支」で発行されていた日本語新聞である。

『東亜新報』関係資料集

―日本占領下華北の日本語新聞とジャーナリスト

『東亜新報』がどのような新聞で、
どのような人物達が作り上げていたのかをいきいきと
浮かび上がらせる記録であり、その姿を今に伝える

『東亜新報』は同盟通信系の人脈とともに、
徳光衣城の大阪毎日新聞時代の部下・関係者の
人脈で構成されており、徳光の存在は非常に大きかった。

編・解題―**神谷 昌史**（滋賀文教短期大学国文学科教授）

造　　本―B6上製（別巻のみA5並製）・総568頁
揃　　価―48,000円（配本毎分売可）
刊　　記―2019年11月

【第一回配本】32,000円　ISBN978-4-909680-59-4

一巻（232頁）

『東亜新報おぼえがき―戦中・華北の新聞記者の記録』（東亜会、1984年）

別巻（168頁）　ISBN978-4-909680-61-7（別巻のみ分売可　15,000円）

冷夢庵『我が生涯』（高木冨五郎、1963年）
＊解題、総目次

【第二回配本】16,000円　ISBN978-4-909680-60-0

二巻（168頁）

『新聞人・徳光衣城』（東亜会有志、1969年）

〔二巻より〕
大正15年7月，東方通信北京支局長時代

『新聞人・徳光衣城』
徳光 衣城　1884-1953
早稲田大学卒業。やまと新聞を経て、1919年、大正日日新聞創刊。東方通信北京市局長。1939年、東亜新報社長。

『我が生涯』
高木 冨五郎　1894-1973
1894年、北海道利尻郡沓形村生。1920年、北米ユタ州邦字紙ユタ日報主筆兼編集長。1921年、東方通信社（外務省機関）ワシントン会議特派員。1941年、東亜新報社（北京）論説委員、編集総長。1953年自由党機関紙『自由党報』編集長。

本書解題目次

はじめに
一、『東亜新報』の発刊
二、徳光衣城と東亜会
三、論説委員・高木冨五郎
おわりに

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書より（〔※〕は原紙より編集・加工）
価格は税別　050／11／4000

関連書のご案内

**『戦前期「外地」雑誌・新聞総覧
―朝鮮・満洲・台湾の言論界』**

【全九巻】
監　　修―井川 充雄
揃　　価―180,000円